

レンダラーズトーク

建築パース展東京会場で毎回好評の「レンダラーズトーク」。
今回は数名の会員に声をかけ、お話をうかがいました。
いつものように、ざっくばらんに

JARAを立ち上げた方々にお話を伺いたくなりました。創立メンバーで今も会員の刈谷さんに、聞いてみましょう！
31年を振り返って、今どんなことを感じていらっしゃいますか？

31年の歳月はやはり永いですね、JARA創立当時は思い返すと、暑苦しく熱気に満ちた、若かった仲間の顔が走馬灯のように浮かんで来ます。しかし、創立当時の49人の会員は殆ど退会し、会長と2~3人の会員しか残っていません。それぞれの事情で退会して行かれたのですが、一人一人本当に素晴らしい人達でした。

いきなり寂しい話で申し訳ありませんが、私自身の現況や世の中の動き等を見ると、無責任に、希望的な話をする訳にもいきません。52年間、アーキテクチュラル・レンダリングの作品を創作してきました。『時代に遅れないように、感性と技術を磨いて行けば食いはぐれる事は無いだろう』と、たかを括っていたのですが、私にとってはCGと云う怪物が表れて、見通しは大きく変わってしまいました。そして今、全ての物創りが、非常なスピードで進行しています。CGの世界も、グローバル化が進み先行き不透明な様です。

そもそも、日本でアーキテクチュラル・レンダリングの職能が生まれて精々50~60年です。建物は、図面があればレンダリングが無くては建ちます、しかし、人間の行為は、目的が達せられれば、過程はどうでも良いと云うものではありません。

一枚の優れたレンダリングの作品は、クライアント、設計者、工事に関わる多くの人々に、もの創りの喜びと夢を与えてきました。私達は、建物の出来上がる過程で、無くてはならない役割を担ってきたのです。月は作物を育てないが、人間にとって無くてはならないものであるように、夢を持って情緒豊かに生きる事こそ人間の人間たる所以です。

スイスに縁のある画家、パウル・クレー(京都)とセガントニーニ(滋賀)の展覧会が続けて開催されました。時代を超えてゆるぎなく私達の心に響いてきます。作者の確固たる信念が圧倒的な迫力で伝わってきます。私のレンダリングの作品がどこまでファイン・アートに近づけたかは、のちの評価に委ねるとしても、私は絶えずその心意気で制作してきました。

今、海外に発注されるレンダリングが増えているようです。私の仕事も激減しています。いろいろ理由があるのですが、日本の多くの物づくりの要求が感性に対してではなく、技術に対してなされ、日本人でしか持ち得ない感性を求めることが少なくなったことが底に流れている要因であるように思われます。

大佛次郎が「帰郷」—1948年—の中で、敗戦で一気にアメリカ文化が流れ込んできて、行く先を見失った日本人に「日本の伝統に裏付けられた日本人の感性を

取り戻せ」と警鐘を鳴らしています。現在の空洞化する日本の産業やコンピューターに翻弄される物創り、そして原発で右往左往する政治を思うにつけ、大佛次郎の警鐘は今も更に高く鳴り続けているように思えます。

しかし、日本人の深く繊細な感性が見直される時が必ず来ると思います。CGで作品を制作されている方も、技術を磨くと共に日本人の感性をじっくりと磨いて下さい。深みのある作品を生む力になると思います。情性で機械的にする仕事は駄目です。

仕事は、わくわくドキドキしながらせねば!

刈谷 拓爾 かりやたくじ
1960年(株)日建設計入社
1965年 独立 レンダリングRIYA設立
現在、RIYA ART ASSOCIATES

